

特集

「生きること」と「死ぬこと」

~「のこされること」と「歩き出すこと』~

作家 重松 清氏

僕は小説を書くようになって18年になりますが、フリークリエイターという、いわゆる取材をして文章を書くという仕事も、もう24年やっています。フリークリエイターは人が生きたり死んだり、あるいは殺されてしまったり自殺をしてしまったり、言ってみれば人が死ぬ話を書く仕事です。でも今日は、自分自身が残された立場になったらどうなるかっていう話をさせてほしいんです。僕の小説家としての初期の数年間は、ひたすら自殺した人間と、残された人間の話を書いてきました。そもそも僕の出発点というのには「自殺って何だろう、そして残されるって何だろう」だったんです。

親友・まこと君

僕には現在仕事を一緒にやっている仲間はたくさんいますけども、いわゆる友達はない。友達は作らないようにしています。それはなぜか。26歳の時に、親友と言っても間違いない友人が自殺をしました。その事がずっと僕の中に負い目となって残っています。彼の名前を、まこと君というふうにお話させていただきます。このまこと君に対する申し訳なさが、彼が亡くなつて20年経ちますが、いまだに負い目として残っているんです。

まこと君は大学に入って最初に知り合った友達です。毎晩のように一緒に酒を飲み、麻雀やつたりバチシコやつたり。当時アイドルだった薬師丸ひろ子さんのポスターを、まこと君と二人で盗みに行つたこともありますし、飲み屋で別のグループとけんかになつて、お店を営業停止にしてしまつたことも(笑)。

そういうことを二人で一緒にいっぱいしてきたんです。僕たちの学部は教育学部だったから、二人とも教員免許を取つて、まこと君は故郷の教員採用試験に受かっていました。一方僕は、学生時代からマスコミで働いていましたから、たまたま、まこと君にある雑誌の編集のアルバイトを勧めました。「おもしろいから、やってみろよ」と言つたら、彼はすっかりその仕事が好きになり、教員ではなく東京の出版社に就職しました。僕も別の出版社に就職して「二人でマスコミを変えてゆこうぜ」ということを生意気にも言っていたんです。でも僕は会社に入つて半年で結婚をして、その3ヶ月後に会社を辞めて無職になつてしまつた。フリークリエイターになりましたが、若い頃はなかなか仕事がない。そこで一番仲の良かったまこと君に「お前のいる週刊誌でフリーで仕事をやらしてくれ」とお願いしたんです。彼は新入社員だったけど仕事をまわしてくれました。だから僕も仕事に関しては、量、質とも誰にも負けないくらい一生懸命頑張りました。でも心の底では、もし彼とけんかをしたら「ああいいよ、重松もういらないよ」と言わ



「僕は本当にいのちの電話の重要さがわかります。僕も、死んでほしくないという思いを込めていつも小説を書いています。」7回目になる自殺防止事業公開講座では、家族の問題や青少年の心理などを取り上げた小説で高い評価を受けている作家の重松清氏をお迎えしました。ご自身の体験から、自殺を大きなテーマとして作家活動を続けているお話を語っていただきました。

れるんじゃないかなと想像して、なかなか学生時代みたいに言いたいことが言えなくなつてしまつたんです。あれだけ兄弟のように仲が良かったまこと君が、だんだん遠ざかってしまう。会社の人がいる前では、彼を呼び捨てにできない。するとどうしても人間関係が変わつてくる。

そういうことを二人で一緒にいっぱいしてきたんです。僕たちの学部は教育学部だったから、二人とも教員免許を取つて、まこと君は故郷の教員採用試験に受かっていました。一方僕は、学生時代からマスコミで働いていましたから、たまたま、まこと君にある雑誌の編集のアルバイトを勧めました。「おもしろいから、やってみろよ」と言つたら、彼はすっかりその仕事が好きになり、教員ではなく東京の出版社に就職しました。僕も別の出版社に就職して「二人でマスコミを変えてゆこうぜ」ということを生意気にも言っていたんです。でも僕は会社に入つて半年で結婚をして、その3ヶ月後に会社を辞めて無職になつてしまつた。フリークリエイターになりましたが、若い頃はなかなか仕事がない。そこで一番仲の良かったまこと君に「お前のいる週刊誌でフリーで仕事をやらしてくれ」とお願いしたんです。彼は新入社員だったけど仕事をまわしてくれました。だから僕も仕事に関しては、量、質とも誰にも負けないくらい一生懸命頑張りました。でも心の底では、もし彼とけんかをしたら「ああいいよ、重松もういらないよ」と言わ



なくて。それでもまこと君に救つてもらつたから、僕はフリークリエイターとしてやつていて、小説を書けるようになつてゐるわけです。そうしたらもう意地でもフリークリエイターをやり続けると、僕は決めました。直木賞をもらった後に「フリークリエイターの仕事は続けます」と言つたらいろいろな所から反発がきて、「ふざけるな」とか言われたりもしました。でもこれはまこと君との、一方的な約束なんですが、守り続けたいと思っています。

言えなかつた後悔はずっと残る

まこと君が7階の非常階段から飛び降りた跡に、たばこの吸い殻が3本残つてました。まこと君が何で死んだのか、考へても僕にはわからない。けれど、どんな思いでその3本のタバコを吸つたんだろう、と思いました。だからそういう場面が、僕の小説の中に繰り返し出でます。僕にとって自殺は大きなテーマになっているんです。それに加えて僕は、言えなかつた後悔とか、言つてしまつた後悔を背負つてゐる人の物語を書きたいんです。やっぱり僕の中に

その事が僕にはものすごく大きかった。あれだけ仲のよかつた友達から、恩を受けてしまつたがために、言いたいことが言えなくなつてしまつた自分が情け

も言つたらきりがないくらい、言えなかつたこと、言うべきだったことがいっぱいあります。おそらく皆さんも、そういう後悔をお持ちだと思います。言葉つて人を救うこともできれば、傷つけることもできる。でも、なるべくだったら、言つた後悔の方がいいと思うんです。なぜかというと、言つてしまつた後悔は、その次に続く反省になるからです。でも、言えなかつた後悔は、ずっと胸に残ります。たまたま僕は小説という形で作品にして発表できるからいいけれども、もしそれができなかつたら、本当にきつかったです。もしも皆さんにマイクをお渡したら、それはお一人お一人たくさんあるでしょう。そういう後悔を背負いながら、僕たちは生きているんだなと思っています。

「怒りの部屋」と「再会の部屋」

阪神淡路大震災を取材時に、親を亡くした子どもたちを支援する組織、あしなが育英会が中心となつて神戸にレインボーハウスというホールを作つたことを知りました。そのホールの中にはいろいろな部屋があります。例えば、「怒りの部屋」。天井も床も壁も真っ赤に塗られていて、サンドバッグやボクシングのグローブが置いてある部屋です。昨日まで元気だったお父さんやお母さんが、地震という理不尽な災害で一瞬に命を奪われた。そうなると、遺された子どもたちはもつて行き場のない怒りやいらいらを、何かにぶつけたくなるんです。その部屋の中ではサンドバッグをたたいてもいいし、物を投げてもいい。壁をたたいてもいい。大声を上げてもいい。遺された人の気持ちというのは、僕たちがわかりやすく想像する「かわいそうだね」とか「さぞや悲しいでしょう」とかだけでは決してない。他には「再会の部屋」だったかな、僕の一番好きな2畳ほどの小さい部屋があります。入るとすぐに机と椅子があつて、天窓が開いていて、そこから光が机の真ん中にさしてくる。そこに亡くなつたお父さんやお母さんの写真を置いて、再会して語りあうための部屋です。ところが、この部屋を一番利用しているのが奥さんを亡くしたお父さんです。会社帰りにちょっと一杯飲んで、ぶらつとやってきて奥さんの写真を置いて、じつと30分くらい閉じこもつて話をしている。その時のお父さんは、30分間どんな話をしているんでしょうか。おそらく最初のうちは嘆いてばかりでしょうね。しかしそれが段々と「息子もこんなに大きくなつたよ」とか、近況報告をするようになるかもしれない。「こ

れからも見守ってくれよ」と言って部屋を出るかもしれない。そうやって、少しずつ、その部屋で過ごす時間も変わっていくんだろうな、と僕は思つています。

亡くなつた人との関係が命を豊かに

でも、本当は僕も変わっていくことが、亡くなつた人を忘れることが怖かったんです。まこと君が死んでしまつたということは、二人で過ごした思い出を知っているのは僕しかいない。そう思うと怖くなつてしまつて、いろんなことを書いたりしていましたが、それでも忘れていくわけです。そして記憶はどんどん薄れていきますが、残るものがあるんですね。普段そんなに意識していないけれど、僕たちは多くの亡くなつた人の思い出と共に、あるいは亡くなつた人の存在と共に生きているんだと思います。僕にはまこと君との思い出があり、まこと君の存在が僕の中にありますから、意地でもフリークリエイターをやめない。彼が最後に吸つた3本のタバコの意味は、一生かけて作家として考えていきたい。そのことによって、まこと君が僕のそばにいると思います。命は直接、親から子どもにも縦に受け継がれていくものです。と、同時に、横から自分の命を豊かにしてくれるものついていふのは、生きている人と人の人間関係だけじゃなくて、亡くなつた人との関係もまた、僕たちのことを豊かにしてくれるんじゃないかなと思っています。

(12月15日川崎いのちの電話主催「自殺防止事業公開講座」より・文責:川崎いのちの電話広報部)



重松 清氏
(しげまつ きよし)

作家、フリークリエイター。1963年岡山県出身。出版社勤務を経て執筆活動に入る。2001年「ビタミンF」で直木賞受賞。現代の家族を描くことをテーマにし、話題作を次々発表。またルボルタージュ、時評、評論など小説以外の活動も高い評価を受けています。「その日のまえに」「定年ゴジラ」「流星ワゴン」「疾走」「卒業」「きよしこ」など多数。